

## 山村の人々から学ぶ

山形県最上地方の最深部、戸沢村角川地区に来て2年が経とうとしている。

長野県北部の農村集落で育った私は、当時の子どもとしては珍しく里山や川で一日中遊び歩く原体験をもつことができた。だが、少年時代の最後の日々には、開発に伴う故郷の変化を目の当たりにすることになった。それは自然環境だけではなく地域の人のつながりをも変えてしまうものだったと言える。

大学では教育学を専攻し、農山村の地域作りと環境教育をテーマにした。研究室だけで勉強していても世の中の事が分からなくなると思い、各地の農山村の環境保全や地域づくりに取り組むNGOやNPOのメンバーと一緒に2年間各地の田舎を渡り歩いた。地元の方々から聞くのは過疎、少子化という農山村の厳しい現状ばかりだった。「人はいなくなって寂しくなっていくばかり、でも何もない村だから仕方ない…。やむを得ないとはいえ、後ろ向きの愚痴ばかりがこぼれる里の人々の語りにうんざりしはじめていた中で戸沢村との出会いがあった。

それは戸沢村の熱い面白おじさん達だった。私がスタッフとして参加していた首都圏での環境シンポジウムでのことだが、彼らの自然や生活文化を子ども達に伝えていきたいという熱い思いに私は感動を覚えた。その話はユーモアに満ちていて面白く、夜遅くまで語り合った。私は「じゃあ今度、遊びに行きますよ」といった気楽な感じで、来村を約束した。

いやもう、来てみると大変な山奥である。標高2000メートルを超える山々に囲まれた信州の山里で育った私が言うのだから間違いないだろう。本格的な山村である。けれども、そこには地域と密接に結びついた人と人、人と自然のつながりがあった。これほど集落住民がお互いに皆知り合っているのは、近年では正直ちょっと驚きだった。近所づきあいの原風景を見ることができた気がする。そして特筆すべきは集落を取り囲む里山、川、田んぼ、畑。その美しい景観はここに暮らす人々が長年かけて暮らしの中で活用しながら磨き上げ創り上げたものであるということだ。私はまたぎのおじさん達から動物の生態を聞き、おばさん達から里山の恵みについて郷土食をつまみながら聞き、子ども達から川遊びの楽しげな話を聞いた。村人の話に耳を傾けていると、なにやら私の中の忘れていた遺伝子が起き上がるような自然のリズムを取り戻すような感覚を覚えた。生き生きと語る彼らの話しぶりに引き込まれた。「住み込んでもっと深くこのことを学びたい」そのような思いを私に抱かせたのは他ならぬ集落のおじさん、おばさん、おじいちゃん、おばあちゃん、そして子ども達だった。農山村出身の私が「農山村には人を魅了する力があるらしい」と初めて確信的に感じた瞬間である。

戸沢村角川の有志（またぎのおじいちゃんや山菜採りのおばあちゃん、若手のオジサンたち）の間では今、地域の自然や文化を再発見し子ども達などに教え伝えようと里作り活動が展開している。私が事務局を任された「角川里の自然環境学校」は住民が作り上げた

成果の一つだ。この地域では何か動きがあると皆に声がけをし、声がけをされたほうもなるべく参加して、皆でわいわい作り上げていくというのが伝統的なスタンスだ。この「自然学校」もそういった集落のやり方で着実に取り組みが進められている。去年はそうした活動に外部からの参加者もあって盛り上がりを見せた。「里作りは地元住民だけではない、地元以外の外部の人たちも参加できるようにして、皆のふるさとにしたい」と声があがり、地元の若者達によって情報発信のホームページも作られた。海外出身のお嫁さん達の協力で英語、韓国語、中国語版も掲載したいと今後の展開の夢を語り合われた。真の国際化とはこのように地域に根ざした草の根的な活動から始まるのだろう。村役場でも共育課がその名が示すように共に育てる学びをスローガンに掲げサポートしている。現代の子ども達、大人達にとって、こうした小さな村の、小さいが温かい手作りの活動から学ぶことは多いのではないだろうか。